



:::::::::::::::::: プログラム :::::::::::::::

プロコフィエフ：古典交響曲 ニ長調 作品25

ストラヴィンスキー：15の奏者による8つのミニアチュア

休憩 20分

ベートーヴェン：交響曲 第1番 ハ長調 作品21

はじめに

生演奏の音楽は一期一会。その瞬間は二度と訪れません。

最高の音楽をお楽しみいただくため、もし演奏中にこの曲目解説をお読みになられているとしましたら、そっと閉じて、今まさにホールに響き渡る最高峰の音楽を、目と耳と肌で感じていただければ幸いです。

さて、2020年は楽聖ベートーヴェンの生誕250年というメモリアル・イヤーで、ザ・シンフォニエッタみよしも交響曲第5番をメインにオール・ベートーヴェン・プログラムを組んでいました。しかし、世界中が感染症によって大変な状況となり、やむなく公演も中止。未知のウイルスを前に、芸術の存続が危ぶまれております。

コピスみよしでは、人を元気にする力を持つ芸術を発信し続けるべく、オンライン配信での無観客コンサートが始まりました。画面を通じて、多くの皆様にご視聴、ご支援いただきました。また、ネットならではの双方向でのやりとりも可能となり、新しい芸術鑑賞の形となりました。

しかしながら、やはり芸術は、アーティストと観衆が同じ空間と時間の中で興奮や感動といった反応をお互い繰り広げることにより生み出されるものではないでしょうか。なにより、音楽を響かせるためのホールという巨大な楽器があってこそ、その感動は増幅されます。

本日のプログラムに登場する3人の作曲家には共通するものがあります。それは、伝統を重んじながらも常に新しいものを追いかけています。コンサートマスターの荒井英治さんは、「皆さんの気持ちがフレッシュになるようなプログラムを考えました。」というメッセージを送っています。愉悦感に満ちた音楽で、コロナの閉塞感を吹き飛ばしていただけたらと心より願っております。

セルゲイ・プロコフィエフ



古典交響曲 ニ長調 作品25

ロシアの作曲家プロコフィエフ(1891-1953)は、1904年に13歳でサンクトペテルブルク音楽院に入学するも、アカデミックな教育方針になじめず、現代音楽サークルなどを通じて西欧の前衛音楽を吸収しました。卒業試験では自作のピアノ協奏曲第1番を演奏し最優秀賞を得ます。以降、ピアノ作品を通してモダニズムを推し進めますが、ロシア革命以後は祖国を離れ、シベリアと日本を経由してアメリカに渡り、1930年代前半までパリで暮らすことになります。現代では古典交響曲として親しまれているこの交響曲第1番は、革命が起きた1917年に完成し、翌年初演されました。彼が遺した7つの交響曲のうち、唯一、祖国を離れる前に書かれた作品となります。

「もしもハイドンが今でも生きていたら書いたであろう作品」として作曲し、作曲者自ら、副題を『古典』と名付けました。4楽章構成であるものの演奏時間は約15分と、明快で愉しい曲想が魅力的な交響曲です。モダンな作風で知られていたプロコフィエフが、この曲で一転してわかりやすく美しい作風を示したこととは、周囲を大変驚かせたそうです。しかし、単なる古典の模倣ではなく、近代的な和声や突然の転調などが用いられ、プロコフィエフならではの感性が息づいています。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

イーゴリ・ストラヴィンスキー



15人の奏者のための8つのミニアチュア

ロシアの作曲家ストラヴィンスキー(1882-1971)は、20世紀音楽の代表者と言っても過言ではないでしょう。革命や大戦に巻き込まれながらも世界を股にかけ活動し、その動向が注目された作曲家の一人です。彼は晩年に至るまで、まるで過去の自分から脱皮するかの如く、常に新しい作曲手法を探求し続けました。音楽家の両親の三男として生まれ、サンクトペテルブルク大学法學部を卒業するも、リムスキイ=コルサコフを師として作曲家としての道を歩みます。1910年「火の鳥」、1911年「ペトルーシュカ」、1913年「春の祭典」と、いわゆる三大バレエ作の成功で躍進の名声を得ることになりました。第一次世界大戦後はフランスに移り住み、1919年から1920年にかけて「プルチネルラ」を制作します。この曲は18世紀初頭の仮面劇をリメイクしたもので、彼の理想とする「古典美」を明確にした作品でした。ほぼ同時期の1921年、8曲から構成されるピアノ小曲集「5本の指で」を作曲します。この曲は子ども用に書かれたやさしい曲ですが、アメリカに移り住んでからの1962年に15楽器のために編曲されたのが、本日演奏する「15人の奏者のための8つのミニアチュア」です。曲順は変わり、単純であった構成は複数の楽器が絡み合うように複雑さを増すなど、かなり手を加えられています。ザ・シンフォニエッタみよしのメンバーの名人芸をご堪能ください。

[楽器編成]ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ2、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン1

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン



交響曲 第1番 ハ長調 作品21 ベーレンライター新版

ドイツの作曲家ベートーヴェン(1770-1827)は、宮廷のテノール歌手だった父に3歳から教育を受け、ピアニストとして類い希なる才能を發揮していました。しかしそのスバルタ教育は度が過ぎており、アルコール依存症で父が失職してからは、ベートーヴェンはいくつも仕事を掛け持ちし、家計を支え、父や幼い兄弟たちの世話を追われる苦悩の日々を過ごします。

1792年、大作曲家ハイドンに弟子入りしウィーンに移住したベートーヴェンは、ピアノのヴィルトゥオーゾ(格別な技巧や能力を有する名手)として名声を博すとともに、自身の創作活動にも精力的に取り組みます。ピアノに関する作品を中心に、弦楽四重奏曲、七重奏曲など室内楽曲も作曲し、ハイドンやモーツアルトら古典派の作曲技法を身につけていきます。そして1799年から1800年にかけて作曲されたのが、この交響曲第1番です。

自らの指揮で1800年4月2日にウィーンのブルク劇場で披露された初演の評価は低く、属七和音で始まる開始部は伝統に対する冒涙で、管楽器を使いすぎるこの曲は管弦楽というより吹奏楽のようだと批難されました。今日よく使われる属七和音は、当時のヨーロッパではひどい不協和音とされていたのです。しかし後になると、新しさと技巧性に富み、飛び抜けて豊かで美しい楽想が展開されていると評価されました。現在では、ハイドンやモーツアルトからの強い影響があるもののベートーヴェンらしさが垣間見られる初期の代表作として知られています。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部